

坂口 奈央 氏 (岩手大学地域防災研究センター准教授)

略歴

1975年 静岡県生まれ
1999～2012年 (株) 岩手めんこいテレビ 報道部兼アナウンサー
2016～2020年 東北大学大学院文学研究科 修了 (博士 文学)
2020～ 日本学術振興会 特別研究員 P.D.
2022～2023年 東北大学 災害科学世界トップレベル研究拠点 特任助教
2023年4月～ 現職

授賞作『生き続ける震災遺構 三陸の人びとの生活史より』
(ナカニシヤ出版、2025年2月)

要旨

震災遺構に対する「恥の場だから解体すべき」とか「船がかわいそう」といった語りを耳にしたことがあるだろうか。また「保存するにしても、解体するにしても、覚悟が必要」とまで語らしめる震災遺構とは、被災当事者にとってどのような存在だったのだろうか。このような語りは、東日本大震災の被災地、三陸に生きる人びとによるもので、震災時にまつわる悲劇にとどまらない、むしろ震災前の地域社会に対する葛藤や苦悩を想起させながら語られていた。

本書は、東日本大震災の被災当事者らが震災遺構に対してどのような意味を見いだしていくのか、東日本大震災後10年以上にわたる参与観察と生活史調査をもとに、海とともに生きてきた人びとの揺れ動くまなざしを動態的に捉え直していく。長期にわたる調査によって見えてきたのは、三陸に生きる生活者から見た震災遺構とは、外部の人たちから与えられた防災や教訓のための公的記憶としての遺構として捉えていたわけではないことである。

一般的に震災遺構というと、「負のシンボル」として象徴的に位置づけられてきた。確かに震災遺構を被災や復興のシンボルとすることで、二度と悲劇を繰り返さないための価値があると整理され、わかりやすく、多くの人に伝わりやすい。しかし復興への道のりは、必ずしも希望に満ちていたり、連帯や共同性といった美辞麗句で回収されたりするものではない。震災という形容しがたい経験や復興プロセスの中で突きつけられてきた複雑な現実を、シンプルな物語に単純化させてしまう。そこで本書では、防災や教訓としての価値を導き出してきたシンボルや集合的記憶概念から捉えるのではなく、被災当事者の視点からどのような意味が生成されていくのか、そのプロセスを生活史調査から明らかにするシンボリック相互作用論を用いて分析した。

取り上げた事例のいくつかは、一時期全国から注目されたインパクトのある光景および出来事である。その一つは、陸に打ち上げられた巨大な船のあり方を巡るもので、岩手県大槌町赤浜地区では婦人会の女性たちが「私たちの働く場を奪わないで」と主張を固辞し、一時地域を二分する議論に発展した。宮城県気仙沼市鹿折地区では、船を見にきた来訪者の姿を目にするたび、「船がかわいそう」と語る男性たちの姿があった。また、町長含む役場職員 28 名が犠牲になった岩手県大槌町の旧役場庁舎をめぐり、「恥の場だから解体すべき」と語る震災時 60 代以上の男性たちもいた。

こうした葛藤や苦悩をにじませた語りは、次第に地域に主体的に生きようとする語りへ変化していく。住宅再建が本格化する発災から 7 年ほどが経過した頃、三陸では「おらほの遺構」と積極的に語る人たちが表れた。その対象物は、時間の経過とともに津波の痕跡を回復させていく、樹木や島などの自然物である。

三陸の人々にとって震災遺構とは、津波に飲み込まれながらも偶然残ったただの無機質な見世物などではない。震災遺構を見るたびに搖らぎ、葛藤しながら、寄り道をしながら人々が生きる意味のかけらを集めていく復興への道のりが、語りによく表れている。彼らにとって、これからも三陸で生き続けていく覚悟という名の現実を新たに生み出していく震災遺構とは、人生を投影する鏡のような存在だった。

これまでの震災遺構をめぐる議論は、保存か解体か、活用できるか否かといったモノとしての価値に固執し、二元論で物事を性急に判断することに偏っていた。震災遺構に対する視点を問い合わせ直し、災害が複雑化する今、震災復興とは、そして震災遺構とは、誰のため、何のためにあるのか、その原点を問い合わせ直す復興検証としての一冊でもある。